



トーマス・マン『魔の山』
上巻のあらすじメモ



目次

『魔の山』上巻のメモ	1
------------------	---

『魔の山』 上巻のメモ

トーマス・マン (1875～1955)。

1924 年発行。

高橋義孝・訳。

1969 年発行。

<時代背景と主要経歴>

1912 年にトーマス・マンの妻カーチャが病気になって、スイス・ダヴォスの高原療養所
に入院したときの見聞をもとに書かれた。

1913 年 (38 歳) から始めて 1924 年 (49 歳) までの 12 年間かかった。

1914～1918 年、第一次世界大戦およびスペイン風邪。多くの若者が死亡。

1929 年ノーベル賞の主な対象作品『ブデンブローク家の人々』。

『マリーオと魔術師』はファシズムの台頭を预言するかのような作品。

1933 年アドルフ・ヒトラーが政権を握る。

ヒトラー政権はマンをナチスの宣伝に協力させようとするが、マンは拒否。

1936 年ドイツ市民権を剥奪される。

1938 年ナチスの文化破壊政策に抵抗しながらアメリカへ移住。

<概要>

堀辰雄の短編『風立ちぬ』(1937) も舞台は高原療養所で療養中の奥さんとのやりとりを
描いた作品。(結核文学という言葉もあるらしい。)

『魔の山』はスイスのダヴォスにあるサナトリウム (療養所) にいところを見舞うために 3
週間のつもりで行った平凡なドイツ人ハンス・カストロープ 23 歳が長期滞在するはめに
なり、恋愛、病気、哲学論議など経験して行く物語。

★★★★☆

<目次>

第 1 章

到着

34 号室

レストランにて

第 2 章

洗礼盤とふたつの姿を持つ祖父について

ティーナッペル家にて。およびハンス・カストルプの精神状態について。

第 3 章

謹厳なしかめ面

朝食

からかい。臨終の聖体拝領。中断された上機嫌。

悪魔 (Satana)

頭の冴え

いいすぎ

むろん女だ！

アルビン氏

悪魔が失敬な提案をする

第 4 章

必要な買い物

時間感覚についての補説

フランス語をしゃべってみる

政治的嫌疑

ヒッペ

精神分析

種々の疑惑と考慮

食卓での談話

不安の昂進。ふたりの祖父とたそがれどきの船遊びとについて

体温計

第 5 章

永遠のスープと突然の光明

「あ、見える」

自由

水銀の気まぐれ

耳科辞典

フマニオーラ (古典学的研究)

まぼろしの肢体

死人の踊り

ワルプルギスの夜

註

<登場人物>

ハンス・カストルプ:ハンブルク育ち。23 歳。造船エンジニア志望。両親を早くに亡くし祖父や叔父に育てられた凡庸な青年。34 号室。★

ティーナッペル領事:ハンスの亡き母の叔父。

ヨーアヒム・ツィームセン:ハンスのいとこ。軍人。★

ドクトル・クロコフスキー:ダヴォスの国際サナトリウムの助手。代診。精神分析家。35 歳くらい。青白い顔。黒い髭。黄色い歯。ハンスと部屋で何か研究。心霊研究・オカルトに走る。★

ドクトル・ベーレンス:同・院長先生。顧問官。★

アドリアティカ・フォン・ミュレンドンク:婦長。旧貴族。アルフレーダ・シルトクネヒト:通称ベルタ看護婦。死んだ騎手を看護していた。

クヌート:ベーレンス顧問官の息子。冬休みに帰省して来る。

ロドヴィゴ・セテムブリーニ:おしゃべりなイタリア人。30～40 歳。教育者。人文主義者。

『進歩促進連盟』に所属し百科事典の編纂を請け負っている。社会主義的なアプローチで人類に人道主義を広めたい。

祖父は秘密結社『炭焼党员』のひとりで煽動的な人物だった。★

トゥー・レ・デュー (ふたりとも):黒ずくめの女。メキシコ人。2 人の息子が肺病でサナトリウムに入院。

ロシア人夫婦:ハンスの隣室で夜毎うるさい。

小人の少女:食堂の給仕。

カロリーヌ・シュテール夫人:太っている。出鱈目な言葉を使う。ゴシップ話好き。

痩せた薄いブロンドの若い娘:ヨーグルトばかり食べる少女。

ヘルミーネ・クレーフエルト:気胸・片肺クラブのノッポの女。気胸の穴を鳴らせる。

ラスムッセン:手首をぶらんとした、灰色がかったブロンド青年。気胸・片肺クラブ。

ゲンザー:唇の分厚い若者。気胸・片肺クラブ。

クラウディア・ショーシャ夫人:上流ロシア人。指輪をしていないが夫は役人。音を立ててドアを開ける不作法な女。朝衣が似合う。★

フュス:28 号室で聖体拝領を受けて死んだ少女。

マルシャ:ロシア娘。美人。ヨーアヒムが気がある。

ミス・ロビンスン:イギリス婦人。

エンゲルハルト嬢:裁縫師と思われた女性。官立高等女学校の先生。ヨーグルトばかり食べる少女の大叔母。ケーニヒスベルク出身。

ドクトル・ブルーメンコール:オデッサ出身。口ひげをはやした、むっつりした若い男。重病。

アルビン:ナイフやピストルを見せびらかす。

イルティス夫人:

レーヴィ嬢:片肺クラブ。象牙色の肌で痩せぼっち。

ザーロモン夫人:アムステルダム出身。日焼け。

マグヌス夫人:ビール製造業者の細君。

パラヴァント検事:

ミクロジヒ大尉:ブカレスト。

マダム・カスパーリアス:ギリシャのミュティレーヌ出身。子犬を飼っている。

デュストムント判事:フリードヒスハーゲン出身。夜、マダム・カスパーリアスの寝室にいた。

アントン・シュネールマン:少年。

アインフーフ:弁護士。40 歳くらいでドン・ファンとして有名。

フレンツヒェン・オーベルダנק:少女。軽症だったが1 年間療養生活を送ることになる。

ポポフ氏:教師。癲癇を起こす癖がある。上流ロシア人席。

カーレン・カールシュタット:19 歳の少女でベーレンス顧問官の私的な院外患者。ハンスとヨーアヒムは彼女をスポーツ観戦、映画鑑賞などに連れて行く。▲

<あらすじ>

両親を早くに亡くしたハンス・カストルプはドイツ・ハンブルクで祖父、裕福な叔父・ティーナッペルに育てられる。

1907 年頃? (第一次世界大戦の前) の夏の盛り、ティーナッペル叔父に勧められて、いとこのヨーアヒムが肺病で療養中のスイス・ダヴォスにある国際サナトリウム『ベルクホーフ』に3 週間ほど行くことにする。

サナトリウムは標高 1500 メートル以上の高地にあり、様々な国籍や人種の男女がそこで高原療養生活を送っていた。

ハンスは隣室のロシア人夫婦の営みにわずらわされたり食堂で食事にたびに療養生活者たちを観察したり、哲学論議(空間を時間で表したり、知性と病気や時間感覚について話したり)をしたりヨーアヒムと山地を散歩をしたりして過ごす。

サナトリウムでは2 週間に一度コンサートが開催される。

イタリア人のセテムブリーニは何事にも嘲笑的だった。

ハンスはサナトリウムで過ごす時間を音楽は意義のあるものにしてくれるのではと反論

する。

ハンスは食堂での様子からヨーアヒムがロシア人マルシャに気があることに気が付いていた。

ドクトル・クロコフスキーはドイツ語で定例の講演会を開いている。

ハンスは講演会の前にひとりで山に散歩に出て、13歳の時のクラスメートで優等生ブリービスラフ・ヒッペのことを思い出す。

ハンスは帰り道、膝の調子を悪くし講演会に遅れてしまう。

ドクトル・クロコフスキーの講演のテーマは「愛について」だった。

「愛は一度闇に埋もれても形を変えて出て来る。それは“病気”としてだ」。

ハンスは食堂の扉をバタンと音を立てて出入りする美貌の婦人に惹かれる。

女教師エンゲハルトからそのショーシャ夫人の名前を聞く。

クラウディア・ショーシャ。ロシア人。

ハンスは食堂でクラウディアを意識しクラウディアもハンスを意識し始める。

セテムブリーニは祖父は革命家であったと話し、1830年のパリ七月革命は天地創造と並び称されると言ったり、オーストリア・ウィーンを陥落して過去の旧弊と決別すべきと話す。

ハンスは人文主義者だった自分の祖父と比べてみるのだった。

ハンスは熱っぽくなったので婦長から体温計を買って計てみると 37.6℃あった。

ヨーアヒムの検診について行って、ドクトル・クロコフスキーから肺病の宣告を受けてしまい自室でしばらく集中的に療養する。

セテムブリーニはハンスの見舞いに来て独自の哲学論を開陳する。

ハンスは集中療養を終えてまた食堂に通うようになる。

クラウディアは戻って来たハンスを見る。

女教師エンゲルハルトは、クラウディアの部屋を訪れるひとりの男がいること、クラウディアがベーレンス顧問官の部屋に行って絵のモデルをしている事を話し、ハンスは狼狽する。

10月になる。

ハンスとヨーアヒムはレントゲン検査の待合室でクラウディアといっしょになる。

緊張するハンス。

クラウディアはヨーアヒムに声をかける。

ハンスはドクトル・クロコフスキーに、ヨーアヒムや自身のレントゲン映像を初めて見せてもらう。

ハンスはテラスでヨーアヒムと気胸のヘルミーネを相手に大声で話をして、クラウドディアの注意を引こうとするが失敗し軽蔑の眼差しを受けて意気消沈し平熱に戻る。しかし山登りでクラウドディアからあたたかい挨拶の返事を受けてハンスの体温はまた 38 度くらいまで戻る。

郵便物を受け取りに行く時にもハンスはクラウドディアに近づく事ができた。図書室でセテムブリーニはハンスに『進歩促進連盟』(International League for the Organization of Progress) の報告と百科事典の編纂の依頼を受けたと話す。『進歩促進連盟』はダーウィンの進化論などをもとに人類の苦悩を取り除くための活動をしているという。自分は連盟の会議にも行きたいが病気のため行けない。セテムブリーニはハンスの将来を考え山を降りるように言うが、ハンスは逡巡する。

ハンスとヨーアヒムはベーレンス顧問官の部屋に招かれ、クラウドディアがモデルになった絵を観たり、医学について話を聴くことが出来る。リンパ液や血液、生と死について。

11 月。雪が積もる。
観光客やスポーツマンがやって来る。
毎年クリスマスにベーレンス顧問官に贈り物をするため、みんなで考える。
セテムブリーニは自身が関わっている書物『苦悩の社会学』を提案する。
ベルクホーフでは患者の読者が盛んだった。
なかでも『誘惑術』というフランスの書物は人気で物議を醸し出した。

ハンスは生命についての本を読み、無機物と有機物について考える。
「生命は純潔を喪った精神の冒険途上における必然的な一歩」

クリスマスが終わってももなく騎手が死んだ。
ベーレンス顧問官の息子クヌートが休暇で帰省する。
ハンスたちはクヌートたちを避ける。

ハンスはヨーアヒムを伴って、花を持って重症患者たちを見舞い始める。

シュテール夫人は色々な噂話をまことしやかに語った。
最初にクリスマスのあとに亡くなった騎手の未亡人を見舞った。
ライラ・ゲルングロースは 16,7 歳の娘だったが 10 日間の間に激しい咯血を 4 回もやった。
ブロンドで青い眼で危篤状態だった。
ふたりの訪問と紫陽花を受け取って母親は喜んでくれたがあの子にとって楽しいちょっ

とした浮気と表現する。

20 歳くらいの青年フリッツ・ロートバインにも紫陽花を持って行った。

フリッツは肋骨切除手術の翌日亡くなった。

ツインマーマン夫人も見舞った。彼女は軽症で気胸法もうまく行ったが旅行先で肺にガスを詰めすぎて重体になってしまった。

夫人は最後は電報で呼ばれた夫の腕に抱かれて亡くなった。

「ふたりとも」という夫人の長男はすでに亡くなっていたが次男ラウロも見舞った。

財産の相続人テディ少年、ドイツ系ロシア人保険外交員アントン・カルロヴィッチ・フェルゲや、ナターリエ・フォン・マリנקロート夫人も見舞った。

セテムブリーニはそんなハンスを見て「死者は死者をして葬らしめよ」という。

フェルゲ氏は不快な気胸の手術のことを話してくれた。

フォン・マリנקロート夫人は 404 病を神から背負わされていた。

若い男と浮気して夫と子供たちを裏切ったが、若い男に捨てられていた。

カーレン・カールシュタットは 19 歳の少女でベーレンス顧問官の私的な院外患者だった。

ふたりはカーレンをスポーツ観戦、映画鑑賞、ホテルのカフェや墓地に連れて行った。

ヨーアヒムを伴ったこれら一連の行動はすべてクラウディアに近づくためのものだった。

謝肉祭。

ヨーアヒムはサナトリウムに来て 1 年、ハンスは 7 ヶ月になっていた。

みんな仮装姿で集まり、ハンスは余興の場を利用してついにクラウディアに鉛筆を借りるフリをして話しかける。

クラウディアはヨーアヒム、ハンス、セテムブリーニらの病状も知っていた。

クラウディアはハンスのようなドイツ人を小市民と呼ぶ。

小市民は道徳を秩序の中に求めるが、自分は自由を求め罪悪や冒険の中に求める。

ハンスは思い切って思いの丈をぶつける。

しかしクラウディアは「遅過ぎた、翌日ダゲスタン (共和国) に帰ることになった」と告げる。

「私の鉛筆、忘れないで返しに来てね」

翌日クラウディアはサナトリウムを去る。

トーマス・マン『魔の山』上巻のあらすじメモ

著 takaidos

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
